

2016年度 聖学院大学総合研究所 ラインホルド・ニーバー研究会 主催
 第1回ラインホルド・ニーバー研究会
 高橋義文教授による「ニーバーと宗教改革-カトリック、ルネサンス、
 セクト的プロテスタンティズムとの関連において-」報告



発題者：高橋義文先生（上段左）

2017年7月24日（月）、今年3月に聖学院大学出版会より高橋義文、柳田洋夫両先生のご翻訳にて出版されたラインホルド・ニーバー著『人間の運命-キリスト教的歴史解釈』をめぐる、高橋先生よりご発表をいただいた。柳田洋夫先生の司会のもと、20名近い出席者をご講演に耳を傾けその後の活発な質疑応答へと進んだ。

初めに、本訳書について安酸敏眞先生（北海学園大学学長）が翻訳の質と意義を極めて高く評価され日本における次世代のニーバー理解への寄与を展望する書評をくださった、との報告がなされた（『本のひろば』8月号）。

高橋先生のご講演は、本年宗教改革500周年を迎えるに際し、本書におけるニーバーの宗教改革理解を再考するものであった。救いにおける恵みの優位性を説きながら「恵みの教理を、中間時的直接的歴史世界にまで徹底することはできなかった」（講演レジュメ5頁）ルター、ルターとは異なり恵みが律法を廃棄するとは考えなかったが、それゆえに新たな道徳主義・律法主義の危険を残したカルヴァン、救いに向けた人間の功績の余地を残し

つつ神の恵みを強調したが、しかし最終的には恵みを教会制度内に閉じ込めて理解したカトリック、「歴史の有意義性の再発見」（講演レジュメ7頁）をもたらしたルネサンス、カトリックの恵みへの安易な制度的依存が「新しい生に向かう真正の変化」（講演レジュメ8頁）をさまたげると批判したプロテスタント諸セクト、というニーバーの基本的理解を高橋先生は丁寧に解説された。そのうえで高橋先生はニーバーの提案する「新たな総合」を検討された。ニーバーは「宗教改革は、罪責の問題に対する究極的な答えである恵みを、生の直接的中間的な諸問題に関連づけることに失敗した」と述べる（講演レジュメ9頁における引用より）。そのうえでニーバーは、「生のすべての直接的中間的な問題」つまり「歴史」（同）の重要性に改めて目を開かせたルネサンスの意義を肯定的に捉えつつ、ルターの・プロテスタント的な恵みの教理を「歴史」のなかでより有機的に展開することを展望しようとしたのであった。

講演後の質問を受けて、高橋先生は、「宗教改革とルネサンスの総合」という壮大な取り組みについて、ニーバー自身は贖罪論における展開を念頭に置いていたようだが、一方で内容については十分には展開しきれていない側面があった、と示唆された。しかしながら、「恵み」という宗教改革の主要な教理の「歴史」における徹底という大きな課題の発見こそは、ニーバー神学の偉大な貢献であるとのことだった。「恵み」と「歴史」の問題は、別の角度から見れば、プロテスタント・キリスト教における倫理の位置づけという論争の多い、大きな問題とも表裏一体となっていると言え、改めてニーバー神学の深遠を垣間見る刺激的なご講演であった。

（文責：島田由紀 [しまだ・ゆき] 聖学院大学人文学部欧米文化学科准教授）